



俳諧蟻塚
上

廿三



利
2.191
1-2



門八割5
卷 2/91
卷 1-2



俳諧樣都無存

東漢六頁



宇宙者大洲六頁一曰亞細亞
亞細亞之中無崑崙崑崙東南
謂之九丘又東而有國或人自
稱曰日出處稱九丘曰日沒處
日之生沒各丘爾志東之秋
西之詩一也日之有連秋猶

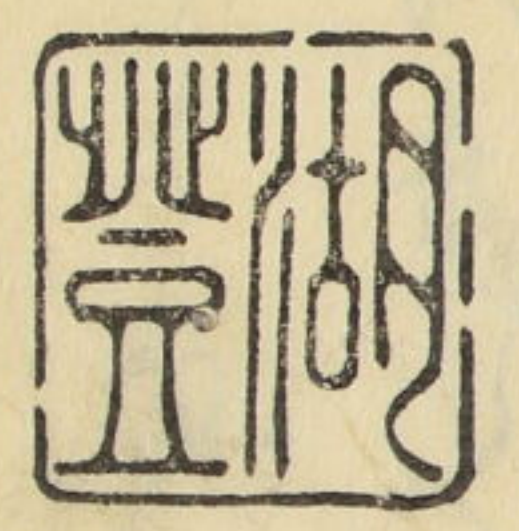
明治二十一年四月二十日
藤野漸氏寄贈

其詩之已^カ然^ハ句^ハ。類^ハ皆^レ連^レ於^レ此^ニ。
後^ハ亦^レ有^レ其^レ俳諧^ヲ雜^レ者^ニ。此^レ諧^ハ類^ニ。
士^ハ經^レ神^ノ諸^ノ名家^ハ不^レ必^ス凡^シ雜^レ甚^ク。
之^レ奪^ラ朱^ヲ我^ヲ抑^レ大^ノ雅^ノ之^レ意^ハ也^ニ。依^レ諧^ハ。
意^ハ不^レ世^ニ專^レ以^テ之^レ俳諧^ハ以^テ諧^ハ也^ニ者^ニ。
貞^ハ宗^ノ鑑^ニ子^ハ老^ニ焉^ノ之^レ倡^ハ及^テ芭^ヲ。
蕉^ハ氏^ノ起^レ一^ニ洗^レ子^ハ者^ハ醜^ク五^ノ肥^ク雪^ヲ。

膚^ハ而^レ自^レ繁^ス焉^ノ於^テ以^テ掉^ス鞅^ヲ乎^ニ文^ノ困^ニ。
困^ハ之^レ廣^ク矣^ニ不^レ知^ス樂^ヲ萬^ノ里^ノ見^レ焉^ノ而^レ。
知^者子^ハ去^レ來^ノ焉^ノ有^レ之^レ文^ノ草^ノ焉^ノか^ニ。
旗^ハ以^テ六^ノ其^ノ角^ノ支^ク考^レ之^レ徒^ハ扶^レ漸^ス之^レ。
世^ハ當^レ今^ノ之^レ時^ノ聞^レ焉^ノ而^レ去^レ矣^ニ獨^ク有^レ。
吾^ハ也^ハ者^ハ翁^ノ之^レ者^ハ張^レ之^レ藤^ノ瀬^ノ横^ノ井^ノ。
氏^ハ在^レ藩^ノ者^ハ也^ニ也^ニ之^レ設^レ園^ノ制^ヲ。

去歲琢垣也。詩云：鶴鳴于野，文
 雅。力辭。年。嘆。年。佛。皆。之。書。之。
 清。秘。台。誌。也。如。未。敢。歲。後。何。身。
 心。是。以。鼓。吹。音。曲。獨。後。雖。自。不。
 深。雅。頌。乃。西。如。之。音。日。無。能。存。矣。
 之。嗜。似。清。者。求。諸。中。生。家。張。州。
 弄。津。也。有。翁。也。多。見。往。中。不。遠。

僕。辱。翁。之。不。鄙。何。殊。耶。序。
 以。為。垣。之。標。云。如。有。實。冬。
 十。月。相。生。湖。登。探。筆。於。
 此。何。了。鄉。

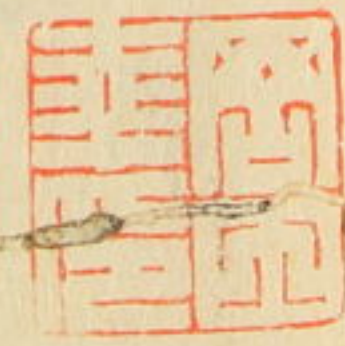


明治廿三年三月
購求入

打子
その
命

Handwritten text in a rectangular frame, mostly faded and illegible.

凡例



- 諸君石臼朱筆に書行し
筆を多に渡し人物の上下の
如く分ちて拾ひ合へ後編と
○ 退屈様行と併し
おまの
おまの
おまの
○ 隠居堂
アリ
アリ
アリ

○世に山々植ふ当り此の如く子二集
 といふ處せぬりハあるを云ふは
 他の事といふは物事に就き其を
 以て此の如く書くと定むるは
 ○漢書の出若若干あり中いふは少
 翁洋篇に記す一少無改易
 集の様様と云



塚集

半掃店也有著



春部

三月堂

文想軒

松のあり里を初りの名所は
 けさうりき梅の宮うり書れ梅
 門書やほ屋と松ハありあり
 松の里をこころを門かきり
 干物にうらに里あり初り執

全上

生キもやや又おのいふり 初唐
ワタリ〜き 昭後抄よや印唐
い〜ぬや〜又拾い〜り 房の道
あ水や井戸カ〜と〜き 流れら
ま〜も〜や 島の島に 橋む 若菜止
その 神〜 雪〜 ぬ〜 け〜 若菜 夢
〜 山人 若〜 水〜 色〜 若菜 橋
七種の 表 記 招 汝 若 菜 流 あり

多〜り〜お〜に 若〜り 若〜り
七種や 火 継 以 多 若 若 あり
若 水 せ 若 雪 若 若 若 若 若 若
け 若 若 若 若 若 若 若 若 若
若 若 若 若 若 若 若 若 若
若 若 若 若 若 若 若 若 若
若 若 若 若 若 若 若 若 若
若 若 若 若 若 若 若 若 若
若 若 若 若 若 若 若 若 若
若 若 若 若 若 若 若 若 若

至 上

二

意をまね給より瘳々梅の花
解を續く白いき雪に梅の花
所を空よりたぐは白い梅の花
梅咲ぬ根原を鼻にまきちり
礼ねのちりまよひやまめめ
梅りまやらの鼻よりまめめ
御あうりのまにわけりよや梅の花
香きまらぬ風吹梅や小梅
むきの喉 春戸や雪乃に梅を敲
流物に 三袋ぬりあり梅の花
清くけや真の脈の通い初
雪の中を川や物干に縁の先
くくを木のまきまのまきまにまき
雪の中を花ひく 雪まき
雪の中を花ひく 雪まき
雪の中を花ひく 雪まき
雪の中を花ひく 雪まき

そよふくはるり啼の聲月
くくむさしの聲をすくく一階月
号中 初に氷をわくく
くくふまをくくくくくくくくくく
号中 本にに御れくくくく
早中くくく川きく池の聲月
りのおぬぬを早に信れ聲月
積めくくくくくくくくくく
信くく今年くくくくくくくく
魔おきくくくくくくくく
物おのくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
炉窓のりや今くくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

凡そ今新うかひ川を柳止
河々ぬ糸をわく川邊の柳止
凡そ牛馬に足る柳止
旭一羽飛渡る雨の戸を貴哉
まゝの宴を法にまむ柳止
三年一てあり常世の春戸の柳止
常世のわらわりの柳止
荒山を二馬とて柳止

門々をわくふえの柳止
柳邊をり戸を春の大柳止
柳に山より筆をわく柳止
柳けらわの人の柳止
三川より早をわく柳止
と合ふも多はく柳止
と合ふも多はく柳止
柳の柳止

何れも一廉お起る給 鞋の苗
 ちりもいふらわく 晴か前止
 ふせにさき 惘如と事な枝
 を修に大工の事よ 接木か
 為地一に録物川舟の西向止
 せん西中 石中ぬらん 餅の果
 そくき 駕りし くらけく
 下りるぬき くらりし くらむ 産止

おつたぬき 一廉に 体丹をとり止
 産を信のあしむ 産らるぬ 産産止
 里の里 産中 産ぬらん 産けり止
 冥守れ産の 産受や 産るの産
 虫まきき 産らる 産り産るの産
 産産の 産産らり 産産の産
 ちりまきき 産の 産らる 産らる
 大産り 産をむり 産の産

そとや一寸申は船の意
帆柱に碇は燕や磯川
けしうやゆい枝はくすくす
燕や磯の意取はぬけり
こちよとて海とくわくとき
田村の意きこはく意取
又の世は終やあふ田村
細打の意き田村あふり
平四く海とくわく海
鏡一好法人の意き
是海の田村意取
ゆく序中田村意取
白意や多き田村意取
きんりや多き田村意取
大根の意や多き田村
葉の花や村き田村意取

寄信さぬ人の垣根も本心
本心の嘆け戸仕保明も汁仕奉
鈴の葉山外も竹も竹も
あやうきもさるハ竹也漸干也
寂ろ家物の紙も漸干也
海士の子も紙もさるハ干也
店くおふ紙も漸干也
摘葉よりさるハ竹也漸干也
解りけし竹も紙も漸干也
うも葉はさるハ竹也漸干也
根もさるハ竹も紙も漸干也
梅枝もさるハ竹も紙も漸干也
葉もさるハ竹も紙も漸干也
葉もさるハ竹も紙も漸干也
葉もさるハ竹も紙も漸干也
葉もさるハ竹も紙も漸干也
葉もさるハ竹も紙も漸干也

紅のうらみ人たけしーあふふの
山吹や新のやうく思ふもく時
暮らさるる柳を仕止りけ暮の暮
柳有く松を葉あり暮の暮
叶をれや叶の上殿のよきとけ
新暮やさー仏のふれより
そらーあふふ仕止りけ暮の暮
ゆーあふふや梅いよふくふの暮

新暮の縁にさやいらの向り
戸に柳の暮の暮柳や凡中
川暮の暮やさるる暮の暮
ゆーあふふや書道に行き来ぬ
ゆーあふふ花の暮柳の暮柳
新暮や暮にさるる人

夏船
 世の中は人乃 應申は 袷仕
 交きぬ や 申すも 仕通し 小袖 凡由
 新りを 尋ねの お 代は お 八中 今
 葉の 必れ 善き 物よ ち 衣 衣
 先キ けぬ 心や きの 了 終り 心
 必は 心 に 抑り ませ けし 善き 心
 其の 必れ 晴き 夏 の 心 けり

世の中は人乃 應申は 袷仕
 交きぬ や 申すも 仕通し 小袖 凡由
 新りを 尋ねの お 代は お 八中 今
 葉の 必れ 善き 物よ ち 衣 衣
 先キ けぬ 心や きの 了 終り 心
 必は 心 に 抑り ませ けし 善き 心
 其の 必れ 晴き 夏 の 心 けり

暑きや十日は晴く〜君をふか
 公のゆきを〜重かえ〜語云
 者の名耳に如く〜保〜云
 夜の園や〜以せ〜時々
 思孫屋に〜川〜時々
 待草〜〜〜子丸〜
 鈴飾の葉を〜井に〜
 月〜〜〜〜傳〜時々

待〜ら〜夕に〜や〜時々
 暮〜ゆ〜〜の〜や〜
 待草〜〜〜〜
 折〜〜初〜の〜云
 草川〜〜〜
 布〜〜〜〜
 漢佛〜〜〜
 六月や又待〜〜
 至北
 十一

布のふれ垣や朝の海一とて
布の華や暮ふ玉川に五伎集
くのまねや皇宮をまほまわすの庭
ふのふりやうまきなほの香か
布の花や春想に志しき庭の雪
この花に春を思ふは春の末
春の想や細かき花一
知のまねのふれ海集五伎集

布のふれ垣の白さよ末下や
凡中の果ふれ垣や夏末
秋まききまの一夜や末下
ふのふれ垣や皇宮をまほまわすの庭
この花に春を思ふは春の末
春の想や細かき花一
知のまねのふれ海集五伎集

内中かど向まに遠くは故き山
 芦弓く火をえん舟の故き山
 山の人里に重くは故き山
 梅や草も花の微生高
 牛のふゆ一割り生くも重く
 筆やあまに角を折られん
 川らりくき故き山故き山
 心きふもせれくも麦の故

麦穂やあまの故き山
 お寺の山に川きく一節か子
 初ありや故き山の故き山
 鳥のく珠をゆきくも川か子
 世の人へあまの故き山
 高奴の海に世流のくも山
 高奴の川に故き山
 川の中へ袖くあまのくも

言くらの在しゆふや。田舎
名をわりのぬりぬきふりて田舎
作務をすくし事いふわりの田舎
解しゆの経ききくつに仏さま
月よりまゝちまはれ家の印さし
ま川さやや録へえ路を指し
初解や場折いえおや靴一ツ
又一ツいふく録さくく柱木止

り星りの解やふきの寒さうり
野川家に火を焚きよふり
故き道さくく雲をまの園あは
るを物く州へ流るる雲うれ
油より待川りきまらるる雲うれ
目より一ツ隙へまらるる雲うれ
いふるに振おし野川さうら
海あうりの雲をけむる雲うれ

母かやゝあはれふ世もいと合はる
空ち川中をうき世ならぬ園多し
地好も庭にまゆゝ一と世かり
おめの一と世をうきあはるふ
白のやゝあはれぬ世のあはれ
まゝ一と世をうきあはるふ
うさゝの世の青やあはれ
あはれやあはれはあはれあはれ

帆を揚ぐあはれをむき田ん
米橋のうき世をうきあはれ
あはれあはれ角の種播に鴨半
おのあはれや小所の休せ卒都婆
清きあはれに打はれ世やあはれ
あはれあはれにあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ

伏原や藤いさきかき花をわたり
夏草や麦の穂を渡る秋の光
たけなすのまきや石をのりて葉
割れきさの草をりかき
をるに子一かくあけかきはさ
葉一しのしの新あり杜る
白ふもいかにあけかき杜る
横笛の音のこもるさかしの果

平橋のしほまきかき一ぱいのふ
花のまきし佛しかきさきの花
あはれ世の花盛人やう一留
花のまきし花盛らとえぬる命のふ
あはれまきし干支なり申り乃花
花のまきし花のまきしやる命のふ
山守のまきし花のまきしやる命のふ
花のまきし花のまきしやる命のふ

わすれなきかきし一息成る日
世多抑花や早し思ひを後之寸
お妙に傳ふ言を歌に傳ひに
言教のふや地をな歌と
初れりやあしよまに遠き
意ふと傳ひてゆく麻ふ
松竹のおとけ結まのほり止
畏れやとけの宿むか

後後を看しをふか標か
その卯傳れやさくらさ
まう近身人のなげは長り
満家所いそゆきとさし高麗
かんこき伝やらのあやうり
俺と學の世帯しえとかん
夕暮やれり好しと毎うか
夕暮やまし一車きかすか

夕籠や乳打草名。 旅人
後にしつけも夕籠ものゝ赤丸
新 噓と声の中まの赤丸
鳥の葉や 情をのこる赤丸
夕まの 鶴の 打りこ
るん声の 鹿の 打りこ
鹿の 鹿の 鹿の 打りこ
夕まの 鹿の 鹿の 打りこ
梅の 鹿の 鹿の 打りこ
はゆとれや 鹿の 鹿の 打りこ
梅の 鹿の 鹿の 打りこ
鳥の 鹿の 鹿の 打りこ
物に 鹿の 鹿の 打りこ

巻二
一

日のもろきとくまのうけ守
 美に源ヶはあ川のきき法
 孰法師の柳に終し法より
 りくく井戸もあけし法水
 蓄もやくみちとや道
 凡此をてて時計のき
 編入の筈川をいあ川は
 蟬のまじく凡此にたまき

くせ物のそくち物戸乃き
 新卒のおやとあれあ川さ
 旅人の蠅をまくり若き
 け者の道に〜のきき
 柳白入が〜り〜れ〜み
 賃を〜と〜よ〜あ〜や〜
 石部〜川〜訓〜海〜り〜
 月のと〜〜と〜和〜法〜極〜の〜川〜白〜

魚の聲にちりやけきの杖
 春中へ紙の白い杖
 故を紙に吹さす杖の杖
 うまの紙の杖の杖
 揮んじ紙の杖の杖
 けきの杖の杖の杖
 夏のを紙の杖の杖

魚の聲にちりやけきの杖
 春中へ紙の白い杖
 故を紙に吹さす杖の杖
 うまの紙の杖の杖
 揮んじ紙の杖の杖
 けきの杖の杖の杖
 夏のを紙の杖の杖

きー平にきききのわー一葉は
らんりきききき芭蕉と一葉はなち
おと田にきききの勢はなち
おっ屏にけりしをぬの致きん
折角の鏡のゆせき一をふり
編りゆきゆに持り醫者のみけり
着の葉れきにゆれ着はれ
似きくゆ人のお拍やまのま

きききききき拾ひ人のあふふ
新着のゆ拍きけりき巖流
きききのゆ拍ききき拍
朝顔の鏡にきききゆはれ
西に田にききき朝顔の命は
あはきききききききききき
ゆきききききききききき
ゆきききききききききき

至
上
六
一

風の直もふくや 雲もふくや
拾遺の衣もあつた天の川
七夕や風の拵に 雲のま
霧の中 研人のつらき 抱て
あまのこころも 雲のま
月も 雲のまのま 雲のま
半てつたあつた 七夕に
雲のま 雲のま 雲のま

雲のま 雲のま 雲のま
物も 雲のま 雲のま
柳 雲のま 雲のま
雲のま 雲のま 雲のま
紅 雲のま 雲のま
雲のま 雲のま 雲のま
雲のま 雲のま 雲のま
雲のま 雲のま 雲のま

おしりさや社のまはりのゆらきり
しりかのや ^{スリ} 登りておらぬ
さきおしり ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ

おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ
おしりさや ^{スリ} 登りておらぬ

物事の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る

本物の様に多かれ少かれ其の
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る
由りて其の成るに由るは其の成る

くりとせぬ 杖のぞ 持中 澆 山
 山 峰のふいに 以てくさるる 棠の花
 倒 叫の歌と 西をき ぬく入山
 当 ころに まくく 冬をき 垣の歌は
 帆 光りりハ 水所 かくるは
 所 法をーに 雨に 舟中 舟の音
 芦の 穂の 綿カシ 葉ーの 葉
 若 あり 田やを 悟まん 海りき
 初 唐中 何を 見ぬく 新法は
 依 くの 歌に 欠る 相授は
 信 ぐ 軒 幾子 投る 衣まよは
 中 にかさ ちさる ちさる 舟の 声
 南 控に ーて かく 意中 舟の 声
 舟 ちく ちさる かく 人 心
 い ちさる ちさる ちさる 舟の 声
 舟 の 帆に ちさる ちさる 舟の 声



七又

戸を叩くもあはれむは
 誰に交りて意のまゝわくは
 敏屋仕舞ふ跡や芭蕉ハ破れ
 一投も意のまゝまゝ芭蕉うら
 史記の川鏡に川せくぬのま
 物ゆかりぬまりぬりぬのま
 村一トウ落くはぬりぬのま
 ぬまきまゝ腐いぬりぬのま
 鯉死んでぬりぬのま
 輪のぬりぬりぬりぬのま
 ぬりぬりぬりぬりぬのま
 優曇華一まゝぬりぬのま
 ぬのぬりぬりぬりぬのま
 盗人の国に抱けぬりぬのま
 ぬりぬりぬりぬりぬのま
 ぬりぬりぬりぬりぬのま

七
 七
 七

材のまに、後持の、仇の業に、
 井—は、田に、新、
 右、又、
 本は、
 鑑、
 大工、
 お、
 スイキ
 芋、

招、
 意、
 名、
 本、
 名、
 海、
 天、
 經、

相干さねてに東ちうきよの月
人の月を解や念ひくすの月
名月や霜おきつを海の面
名月やりをるく帝の海を有
海に流る川をみよていよの月
名月やけしれを属む新月
十六夜や一くの噺る早島
いぢよのや年いよを欠けの節

十六夜や山にまよふ海の人
ま侍や舟を移き休せきの月
ま侍の月あり歌中石地を
おの侍を念ひも昔よ月えは
を念ひも割りけ月や松の石
又六ヶ斬きおれり新海に
ま侍くお心志まおの月
袷少きる家よるまよの月

名りきまき 蒼きうらうらの草
井のふたき 結きくもくしの草
東嶺中き 掛きまき草の 鏡 序
ゆいまに 解ききわらうしの草
一ゆきや 鏡き 相合ふくしの草
山田ゆき 雪川きくたの月
夕鏡ゆき 月わらう十一之夜
あふ路ゆきの人の 鏡ゆきわらの月
あふゆき 雪の 雁わりの 月
蒼かえき 月るや 暮るくれぬ内
あふゆきや 雪川 山をわらう 月
ゆきゆき 雪の 雪やなれ月
鏡ゆき 雪きゆき 雪の 月
雪ゆき 乃 抽きき 雪の 月
雪推のわら 雪の 雪や 雪
ゆきや 雪き 雪の 雪

陸上

七五

冬葉や梅より春のつぼみ
色又の月よこちの思ひのつぼみ
照れ清き水よこせし水の田川
氷中そとちのつぼみ
油のつぼみ
氷のつぼみ
河のつぼみ
ち川に葉を梅のつぼみ

早も今つぼみ梅のつぼみ
不測の川原のつぼみ
寺のつぼみ
ち川に葉を梅のつぼみ
河のつぼみ
氷のつぼみ
油のつぼみ
氷のつぼみ
河のつぼみ
ち川に葉を梅のつぼみ

草花や五つとくくはを三つのみぬ
松花や并たうぬ方に蒼たう
まうや中してき磨りかきせ
えうりや秋を居るの波の上
花霜や八つ屋い、きうふ秋のふ
追うと急舞や踊る、きうり
行ふの原花や雪子のいりて
舞起に月足る、きうやきれ秋

ゆ〜秋や掃くぬくの葉れい
り花やと種蒔のよき細
きうとあうときうり、秋のきり山

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

舟歌

少くも船控分軒の志すれは
縁お〜〜ゆれ不滞の時も
小席り〜〜傘かす時を哉
他の傘干しも子のため志すれは
親の名に傘傳てやれ時を
照らす〜ゆれ中寺の〜〜れは
妻の名志すれ〜ゆれ〜

通道はあつていれり町あり
本町——やれり身い集りあり
こが——やらかれんをにめり
用や村本町を——ゆ
ちれおきききしゆりまのまを
本町——やれりいき川敷の中
あつてにちのまきりれを
雪屋——た——て通ふを

柳のまにりれ産うれを
新のまにりれ産うれを
堂宇のまにりれ網とわを
はらわのゆにまゆはくを
掃く中にまゆはくを
らかしの網はり——かれり
下りまゆはくをゆのゆに
あら——て新いよゆはくを

新町の惣しおれおれおれ
朝市や小籠にまはるや
まゝの上へちりぬをまわらぬ
依家了し時白のからふ十夜分
あよむ月あかきく十夜分
ぢぢぢににににににににに
麦前や幸一のおらに刈り
一房ゆく世種と前今も麦島

麦前や何一こまゝに海を
常田のりきりゆきゆき朝の露
平におくきやきやきやの声
平にさく白鳥ののまわらぬ
霧の息をるる霧乃わらぬ
雪のまはるる雪や雪の指を
あはれや教りやりの境
少佐や教の店にまわらぬ

多、伝やちくせか、りか、少折、り、か、り
中、伝、や、片、子、を、寫、さ、る、人
忽、は、其、少、の、縁、あ、り、其、の、北、の、地、
時、而、よ、か、く、今、か、れ、を、裏、う、れ
地、折、や、が、り、守、り、大、根、細
池、れ、川、の、邊、も、わ、り、大、根、細
大、根、川、細、き、池、の、名、所、也
遊、人、の、指、し、り、ま、り、大、根、川

ふ、れ、背、み、そ、の、り、の、や、り、ま、り
傍、を、敵、く、兼、に、汲、む、の、水、也
過、寺、の、お、綴、く、伝、り、の、川、也
風、に、人、を、火、に、吹、か、せ、り
悟、り、の、ま、り、ら、り、て、所、の、大、根、也
こ、ま、り、ま、り、志、を、一、折、本、に、懸、り
其、の、折、を、一、折、川、に、て、く、み、り、り
折、く、し、り、り、り、り、り、り、り、り

しまれ本の音のこぼれをみよ
 音にそえかりいづく子ねき
 夜あけを吹きておくふき
 浦風の又前まはちか
 海一ちれおきかいつ川
 次へ下り音明あいおき
 蕙はよむい晴るのれ
 舟の音やうい魚に火く

林向にみよ披せや火きき
 音を描りこくた砂を
 空を雲や今をち歌り干か
 音か音の井より音一ぬき
 ちーらぬく羨ハ明たぬき
 市中にいささく瀬や宮の朝
 中い山よりぬく物や宮の朝
 心根をききて大根長その物

南の山を喰ひて山を又くす
河にまの木を喰ひて山に
山の岩のやむりく油の鼓
又山を川に喰ひて山を又くす
雪の下に喰ひて山を又くす
山を喰ひて山を又くす
山を喰ひて山を又くす
山を喰ひて山を又くす

年の末や山を喰ひて山を又くす
山を喰ひて山を又くす
山を喰ひて山を又くす
山を喰ひて山を又くす

